からくりと能

―「融大臣三日月雛形」を中心に―

山田和人

はじめに

からくりの素材として、謡曲は欠かすことのできないもののひとつである。からくりの動態を理解していくうえでも、謡曲の詞章との関連を見極めることは重要であり、そのつながりを通して、からくり関連資料の本文にも絵にも見出すことのできない人形の演技や演出をさぐることができる場合もあるように思う。そこで、本稿では、からくり人形の演技や演出を理解するために、謡曲の詞章をどのように関連資料として利用していくことができるか、その試論を提出してみたい。

ここでは、竹田からくり「融大臣三日月雛形」を中心に据えて考察を進める。本作は謡曲『融』が素材である。それぞれを比較検討していきながら、からくりの絵画資料をいかに読むかという問題に迫ってみたい。

一、「融大臣三日月雛形」の絵画資料

その前にまず、このからくりの収められている絵画資料をまとめて紹介しておきたい。今回、『融大臣三日月雛形』を取りあげることにしたのも、このからくりが所収されている吉徳資料室の絵尽しを紹介しようという意図も込められており、後ほどこの資料の詳細については触れたいと思う。

からくり関連の絵画資料については、複数の資料を比較検討することによって、より詳細にその動態を探ることができる。従来、「融大臣三日月雛形」の絵尽しは、東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵からくり絵本『機関千種の実生』の「融大臣三日月雛形」、東京大学総合図書館所蔵絵尽し『身延山恵方伝記』所収「とほるの

大臣」、東京大学総合図書館霞亭文庫所蔵絵番付の「融大臣名月雛形」、三井文庫所蔵の一枚が知られている。さらに吉徳資料室の絵尽し所収の「融大臣三日月目録」がある。

それぞれについては、『機関千種の実生』は、明和四年のからくり絵本であり、竹田芝居の江戸興行の模様を伝えている。辰松座での興行である。また、『身延山恵方伝記』は、享和年間から文化年間。大坂竹田か（『歌舞伎絵尽し年表』）とされている。東京大学霞亭文庫所蔵絵番付は、明和四年九月、竹田芝居による大坂の興行である（鶴見誠氏「並木正三と『からくり』の関係『白百合女子大学研究紀要』七号　一九七一年三月）。これのみ本文をともなわない。吉徳資料室所蔵絵尽しの「融大臣三日月目録」は、寛政二年の竹田芝居の江戸下りの興行で、薩摩座での上演である。三井文庫所蔵の一枚と同版であり、三井文庫本が吉徳資料室の三枚続きの絵尽しのうちの最終丁にあたる。

これら四点の絵画資料からうかがいしれる融大臣のからくりの動態を探っていきたい。

二、絵画資料の絵と本文

まず、これらの絵画資料の絵と本文を掲げておく。

東京都立中央図書館所蔵からくり絵本『機関千種の実生』の「融大臣三日月雛形」

＊さて此さいくはとほるのをとゝちかのしほかまをうつしましたるしゆこう

さいしよはしほくみの人きやううたにあはせみぶりがござります

それよりまへなる水ふねへわたりましてしほをくみまして
また人きやうはもとのだいへもどりますれは　かの人きやうと
ほるのおとゞとかはりまして　うたひのきりまひのていがござりまする

＊さてまへなる水舟はおのれとかたぶきますれば　みづはこと〳〵くこぼれましてうちよりあまたうをがながれまする

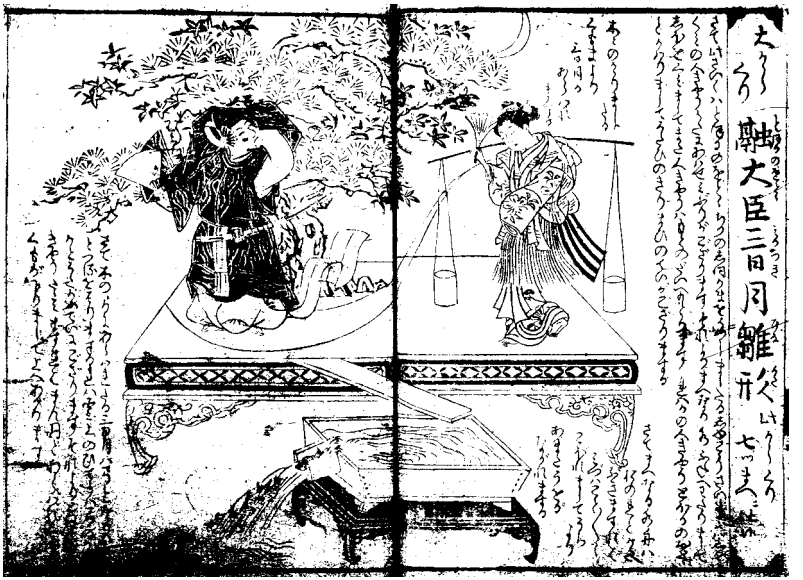
＊木々のかゝりましたるくもまより三日月かあらはれまする

＊さて木の間にあらはれたる三日月はゆみとなりおのれとつるをはりまするれは雲上のひてうは弓のかげかとうたがふていにござります

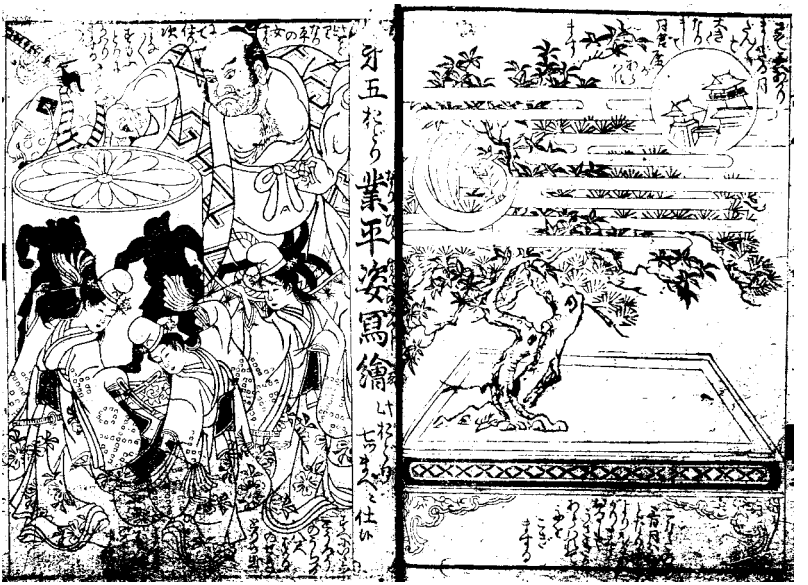
それよりとほるの人きやうたゝみますれはまん月とあらはれ上よりくもが下りまして上へあがります

＊さて上へあがりましたる月だん〳〵と大きくなりまして月宮殿があらはれます

＊こなたの三日月は舟となり中よりほがあがります　おなし



東京都立中央図書館所蔵『機関千種の実生』



東京都立中央図書館所蔵『機関千種の実生』

くうさきがあらはれて舟をこぎまする

吉徳資料室所蔵絵尽し「融大臣三日月目録」

＊最初まへなる水ふねの中をあらため水を入おく

扨あまの人形はしほをくむはたらきありて　後あまの人形はとをるのおとゝのすがたとなりていろ〳〵はたらきある

後もみぢのゑだよりにぢのかけはしさかる　おとゞ人形は月とけし　かけばしニうつりそらへのぼる

＊三日月あらわるゝそのかたちつりばりとなる

＊水ふね中にうをおゝくわきいづるからくり　たん〳〵と月はまんげつと成からくり

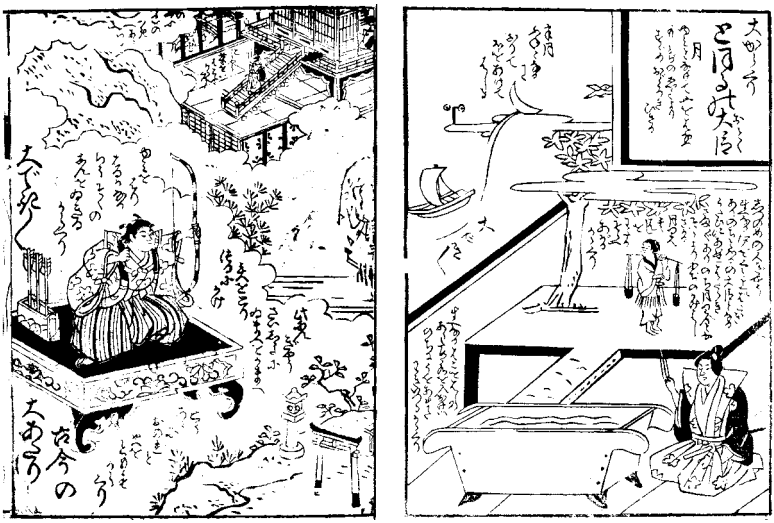
＊三日月ゆみとなる　矢をはなせはこなたの枝よりとりあまたとびさる　其後三日月ふねとなる　中よりうさぎあらはれほをあけそらよりぶたひへうつりはしり入ル

東京大学総合図書館所蔵絵尽し『身延山恵方伝記』所収「とほるの大臣」

＊しつのめの人ぎやうまへなる汐をくみ上ルはたらきありのちとほるの大臣となる　うたひにあはせはたらきさま〳〵あり　のち月りんとな□そらよりにぢのかけはしさがる　月りん其はしをわたりそらへあがるからくり

＊月ゆみとなりてやをはなつ　もみぢのゑたよりすゞめおど

吉徳資料室所蔵絵尽し



東京大学総合図書館所蔵絵尽くし

ろき□ひさる
　＊まへなるはこをはしめあらため水を入おけは　のちにうを
あまたわきいつるからくり
　＊半月ふねとなる　おりてほをあけてはしる

三、謡曲本文との対応関係

このからくりが、どのように上演されたものか、詳細に比較していきたい。

記述が最も詳細にわたるのは、『機関千種の実生』の「融大臣三日月雛形」であり、これを基本に他の資料と比較検討していく。

このからくりは、能『融』をもとに構成されたものであり、謡にあわせて所作をするということが本文にも記されている。そこで、この謡曲の本文との対応関係を見ておきたい。

まず、汐汲の娘人形の所作に対応していると考えられる本文を掲げる。

謡曲では、汐汲の老人が、掛け合いの謡に合わせて名所を教え、地謡になるとシテが田子を担げて潮を組んだ後に、舞台を回り中央で田子を捨てて中入りする。ちょうど、中入りの直前のロンギの部分である（以下、謡曲本文は、小学館『日本古典文学全集』謡曲集二所収寛永六年刊『寛永卯月月本』を使用した）。

地謡　眺めやる、そなたの空は白雲の、はや暮れ初むる遠山の、峰も木深く見えたるは、いかなる所なるらん。

シテ　あれこそ大原や、小塩の山も今日こそは、御覧じ初めつらめ。なほなほ問はせ給へや。

地謡　聞くにつけても秋の風、吹く方なれや峰続き、西に見ゆるはいづくぞ。

シテ　秋もはや、秋もはや、半ば更け行く松の尾の、嵐山も見えたり。

地謡　嵐更け行く秋の夜の、空澄み昇る月影に、

シテ　さす汐時もはや過ぎて、

地謡　隙も惜し照る月に愛で、

シテ　興に乗じて

地謡　身をばげに、忘れたり秋の夜の、長物語よしなや、まづいざや汐を汲まんとて、持つや田子の浦、東からげの汐衣、汲めば月をも袖に望汐の、汀に帰る波の夜の、老人と見えつるが、汐曇りにかき紛れて、跡も見えずなりにけり、跡をも見せずなりにけり。

この謡に合わせて、汐汲の老人ではなく娘人形が所作をして、からくり台の前に設けられた水槽との間の橋懸かりで汐汲の振りを見せた後、もとのからくり台に戻っていくという動きが振り付けられたものと推定される。

続いて、後ジテが登場して、塩竈の景を移した河原の院の昔を偲び、月の光の下で舞を舞って月の都へと去っていくという終末部である。能の出端、早舞に相当する場面である。

出端

シテ　忘れて年を経しものを、また古に帰る波の、満つ塩竈の浦人の、今宵の月を陸奥の、千賀の浦曲も遠き世に、その名を残す公卿、融の大臣とはわが事なり。われ塩竈の浦に心を寄せ、あの籬が島の松蔭に、明月に舟を浮べ、月宮殿の白衣の袖も、三五夜中の新月の色。

シテ　千重振るや、雪を廻らす雲の袖、

地謡　さすや桂の枝々に、

シテ　光を花と、散らすよそほひ。

地謡　ここにも名に立つ白河の波の、

シテ　あら面白や曲水の盃、受けたり受けたり遊舞の袖。

早舞

地謡　あら面白の遊楽や、そも明月のその中に、まだ初月の宵々に、影も姿も少きは、いかなる謂れなるらん。

シテ　それは西岫に、入日のいまだ近ければ、その影に隠さるる、たとへば月のある夜は、星の薄きがごとくなり。

地謡　青陽の春の初めには、
シテ　霞む夕の遠山、
地謡　黛の色に三日月の、
シテ　影を舟にもたとへたり
地謡　また水中の遊魚は、
シテ　鉤と疑ふ。
地謡　雲上の飛鳥は、
シテ　弓の影とも驚く。
地謡　一輪も降らず、
シテ　万水も昇らず、
地謡　鳥は池辺の樹に宿し、
シテ　魚は月下の波に臥す。
地謡　聞くとも飽かじ秋の夜の、
シテ　鳥も鳴き、
地謡　鐘も聞えて、
シテ　月もはや、
地謡　影かたぶきて明け方の、雲となり雨となる。この光陰に誘はれて、月の都に、入り給ふよそほひ、あら名残惜しの面影や、名残惜しの面影。

四、謡曲とからくりの動態

汐汲の娘人形から融大臣に変身して、「うたひのきりまひのてい」を演じるとあり、早舞の部分を演じるものかと思う。からくりは、謡曲の詞章に当込んで振付けをするのが一般的であり、この場合も同様であったと考えられる。そこで、この箇所の詞章に注目してみると、「融大臣三日月雛形」の演技・演出を推測する手がかりになるように思う。

このからくりは、ふたつのからくり台で構成されている。ひとつは、籬が島を模した松に紅葉を配したからくり台であり、もうひとつは、その前に置かれた水槽である。なぜ、この水槽を配してあるのか。これは、最初に口上人が水槽の中を見物に改めさせて中に何もないことを見せておいて、その後、この水槽から魚がたくさん湧き出してくるという趣向であった。なぜ、魚が湧き出してくるからくりを設けなければならなかったのか。おそらく、それは、「また水中の遊魚は、鉤と疑ふ」の詞章に連動させるためであろう。いや、この詞章に当込むことで、魚の湧出するからくりを組み込んだのであろう。

ここで、詞章中に「鉤」が出てくることにも注目しておかなければならない。すなわち、月が「釣針」のかたちに変化するというか

東京大学総合図書館霞亭文庫所蔵絵番付

らくりが、吉徳資料室の絵尽しの本文と東大霞亭文庫の絵番付の絵に描かれている。ここで、わざわざ月が釣針に変化するという、からくりを設けた理由がこの詞章の当込みのためであると考えれば、この趣向の意味が明らかになる。このふたつのからくりは連動しなければならなかったのである。謡曲の本文に対応させてからくりの演技・演出が行われたのである。

月が弓に変化して、弦に張った矢が紅葉の枝に当たると、鳥（『身延山恵方伝記』には雀とある）が飛び去るからくりがある。これも、先の詞章に続けて、「雲上の飛鳥は、弓の影とも驚く。」の詞章を当込んだものと考えられる。というのも、『機関千種の実生』の本文中に「雲上のひてうは弓のかげかとうたがふてい」とあり、このからくりが謡曲の詞章を当込んで、弓を射るからくりが演じられたものであったことは間違いない。

このように謡曲の詞章を当込んでからくりを構想しているものであるならば、からくりの本文中には書かれていないが、先の詞章に続く、鳥の鳴き声（「鳥も鳴き」）、鐘の声（「鐘も聞えて」）が響き、雲が出て、雨が降る（「雲となり、雨となる」）からくりが演じられた可能性も想定しておく必要がある。雲が雨を降らすからくりは、浄瑠璃作品の挿絵などにも事例が認められる。お決まりのからくりと言える。

最後に融の大臣が月の都に消えていくという場面になるが、からくりでは、すでに融の大臣は、月へと姿を変じている。『機関千種の実生』では、「とほるの人きやうたゝみまするはまん月とあらはれ」とあり、おそらく、融の大臣の人形の上半身が後方か前方に折り畳まれて布を張るかたちで満月となるのであろう。ここでいう「たたみまするは」は、竹田からくり「傀儡師」にも、同様の表現があり、愛知県半田市亀崎に伝承されている竹田からくりの現存例と推定されている「傀儡師」の実例では、傀儡師の上半身が首掛けの箱の中に折り畳まれて収納されるかたちになっている。融の大臣の人形もそうしたかたちで変化したものかと想像される。

融の大臣が変化した、その月のなかに月宮殿が現われるからくりが仕組まれており、これが文字通り、「月の都」へ消えていくという謡曲の結構を転じた、からくり版の趣向であった。

謡曲では、前後の二場ともに月が中心になっており、からくりでも、月が釣針になり、弓になり、舟になり、月宮殿が月のなかに現われるなど、月の変化を楽しませるものになっている。さまざまな変化が謡曲の詞章に当込まれて演出されたのである。

最後に月が舟になり、兎が舟を漕ぎ、その舟が舞台に降りて走るというのも、こうした月を中心に据えたからくり版融の大臣のラストシーンとしてはふさわしい。当時の人々の身近なイメージとして

の兎と月、その兎が月の変じた舟を漕ぐというのはいかにも楽しい。

五、「融大臣三日月雛形」の動態

以上の考察を受けて、このからくりの動態を推測すると、次のようにまとめることができる。

一、**このからくりの細工は、能『融』に因んで、千賀の鹽釜を六条河原の院に写したという説話に基づいて趣向を構えたものである。**

さて此さいくはとほるのをとゝちかのしほかまをうつしましたるしゆこう（都立中央・千種）

二、**最初に、からくり台の前に水舟の中を見物に何の仕掛けもないことを見せておく。やがて、この水槽から魚がたくさん出てくるというからくりの前フリである。これは、からくりが始まる前に口上人が扇を逆さにして見物に弁舌さわやかに語るところである。**

最初まへなる水ふねの中をあらため水を入おく（吉徳・絵尽し）

まへなるはこをはしめあらため水を入おけは（霞亭・絵番付）

三、**汐汲の娘人形が唄に合わせて踊りの所作をして、その後、娘人形は、台から水舟の前へと進み、汐汲の所作をして、もとのからくり台へともどる。娘人形は、融大臣人形に変身して、能の切り舞を演じる。**

さいしよはしほくみの人きやううたにあはせみぶりがござりま

す

それよりまへなる水ふねへわたりましてしほをくみまして　また人きやうはもとのだいへもどりますれは　かの人きやうとほるのおとゞとかはりまして　うたひのきりまひのていがござりまする（都立中央・千種）

扨あまの人形はしほをくむはたらきありて　後あまの人形はとをるのおとゝのすがたとなりていろ〳〵はたらきある（吉徳・絵尽し）

しつのめの人ぎやうまへなる汐をくみ上ルはたらきあり

のちとほるの大臣となる　うたひにあはせはたらきさま〴〵あり（東大・身延山）

四、**木々の間から三日月が現われてくる。そのかたちがやがて釣針のかたちとなる。それと連動して水舟から魚が湧き出すのであろう。**

木々のかゝりましたるくもまより三日月かあらはれまする（都立中央・千種）

三日月あらわるゝそのかたちつりばりとなる（吉徳・絵尽し）

本文にはないが、絵のなかに月が釣り針になっているところが唯一描かれている（東大霞亭・絵番付）

五、**水槽の中には、何もいなかったはずであるにもかかわらず、たくさんの魚がわき出てくる。水槽が自ずと傾いて自然に水がこぼれ出るように仕組まれている。**

さてまへなる水舟はおのれとかたぶきますれば　みづはこと〳〵くこぼれましてうちよりあまたうをがながれまする（都立中央・千種）

水ふね中にうをおゝくわきいづるからくり

のちにうをあまたわきいつるからくり（東大・身延山）

六、**三日月が弓となり、自ずと弦を張り、矢を放つと、紅葉の枝から雀が驚き飛び去る（この後、鳥の鳴き声、鐘の声が響き、雲が出て、雨が降るか）。**

さて木の間にあらはれたる三日月はゆみとなりおのれとつるをはりまするれは雲上のひてうは弓のかげかとうたがふていにござります（都立中央・千種）

三日月ゆみとなる　矢をはなせはこなたの枝よりとりあまたとびさる（吉徳・絵尽し）

月ゆみとなりてやをはなつ　もみぢのゑたよりすゞめおどろき□（ゞ）ひさる（東大・身延山）

七、**紅葉の枝から虹の掛け橋が下がってくる。大臣人形は体が畳み込まれて満月となり、月は掛け橋を渡って上っていく。掛け橋の雲は月を引き上げるための装置となっていたかもしれない。**

それよりとほるの人きやうたゝみますれはまん月とあらはれ
上よりくもが下りまして上へあがります（都立中央・千種）
後もみぢのゑだよりにぢのかけはしさかる　おとゞ人形は月と
けし　かけばしニうつりそらへのぼる（吉徳・絵尽し）
のち月りんとな□（マヽ）そらよりにぢのかけはしさがる　月りん其は
しをわたりそらへあがるからくり（東大・身延山）

八、**大臣人形が化した満月のなかに「月宮殿」が現われる。**

さて上へあがりましたる月だん〳〵と大きくなりまして月宮殿
があらはれます（都立中央・千種）

九、**釣針となっていた三日月は、舟となって帆があがる。兎が現われて舟を漕ぐ演出もあった。この舟がやがて舞台に降りて走る。**

こなたの三日月は舟となり中よりほがあがります　おなしくう
さきがあらはれて舟をこぎまする（都立中央・千種）
其後三日月ふねとなる　中よりうさぎあらはれ　ほをあけそら
よりぶたひへうつりはしり入ル（吉徳・絵尽し）
半月ふねとなる　おりてほをあけてはしる（東大・身延山）

おわりに

謡曲に取材したからくりの演技・演目のなかには、今回取りあげた融の大臣の場合のように、その詞章を当込み、全体の趣向を換骨奪胎していく手法をとるものも多い。こうした場合、謡曲の詞章がからくりの演技・演出を探るうえで、きわめて貴重な資料となる。からくりの絵画資料には表記されていないからくりやその動きをとらえることができる可能性を有しており、そうした可能性を想定しながら比較検討していくことで、さらにからくりの動態研究が深まるのではないかと思う。

なお、写真掲載を御快諾いただいた関係諸機関に深謝申し上げます。